

ちよら

K
A
N
N
A

目次

① 試験、合格？	5
② 彩美の正体！	26
③ 雄先輩とデート！	49
④ 雄先輩とお別れ	72

ああ。ドキドキする。ヤバイ！
 私は、部屋のベットで転げ回っていたら、ベットから落ちちゃった。でも、それどころじゃない。ドキドキしすぎて、死にそう！
 明日は、国家試験の結果が出るのよ！ ああ。失敗したらどうしよう……。そう考えると、そわそわしてきた。私、佐々木れいか。みんなからは、れいちゃんって、呼ばれていることが多いの。私、れいかは、明日、試験合格するのだろうか？ それとも、脱落するのだろうか？ みんな！ 試験合格を願って！ 鳥肌たっちゃん。

① 試験、合格？

朝の食卓。

私は、コーヒーを飲みながらため息をついた。

「合格できるかな？」

パソコンやスマホに結果が出るの。午前10時から結果が出るのよ！ 今は、8時だから、あと、2時間しかないわ！

「や、やばい。心の準備ができてない！」

「何言ってるの？ 頭冷やしに行ってくれば？」

妹の美穂がツインテールの髪を揺らした。

「そうね！ そのてが、あつたわね！」

私は、親指を立てて、OKのサインを立てると、美穂の目が点になった。

外にでて、空気を、めい、いっぱい、吸った。

「ふう〜！ よ〜し、頑張るぞ〜！」

そう決心して、部屋に入った。私が、結果、合格を願っている試験は、合格すれば、看護師になれるの。これが最後。ここまで上がってきたのは、すごいよ！ ほめてね！ しかも、F I X病院の看護師の募集をしていたんだよ。チャンス！ っつてね。

「お〜い！ 10時になったわよ！」

「はーい！」

お母さんが時計を見て伝えてくれる。

私は、スマホをチェックした。

落ちるか、落ちないか、落ちるか、落ちないか……。

「あ……。」

私は黙ったままだ。

「で、どうなったの？」

「あ……、あ……、あ！ じゅ、受験、ご、合格！」

私は泣きながら言った。

まさか、ご、合格だなんて……。

「やった〜！ よかったな！ これで看護師になれる！」

私、合格しちゃった。それで、よかったのかなあ」

「頑張ったわね」

美穂が私の前にハンカチを差し出した。いつもながら、女子力高いわ。可愛いピチャマのマーク。私の、好きなキャラクター！

「み、美穂。ありがとう！ 蓮もありがとう！」

私は、弟たちを、抱く。

私は、目に、涙が浮かび、すう〜と、ほおに流れ落ちた。

「お姉ちゃん、そんなことより、あかねちゃんと一緒でしょ？ 頑張らなくちゃ！」

「そうね。私、頑張る。でも、親友の彩美も一緒だから、心強い。」

「ねえ。まず、書類を書かなくちゃ。明日から、FIX病院で働きますって」
そこでハッとした。

「そうだ。そのこと、忘れていた。」

すっかり忘れてた！ けど、

「でもお〜。募集してた時に、紙に書いたよ？」

私は首をかしげた。

「でも、合格したかどうか、知らないでしょ？」

美穂が言った。

「そ、そうね」

まず、私が合格するなんて、思っていないと思うわ。

「とにかく！あかねに何か言われそうで、怖い！」

そうなんだよ。あかねは怖いんだよ。

「まあ。あかねちゃんが合格するかどうか知らないだし、いなければ、お姉ちゃんは有利だよね」

「そ、そうだね」

私は頷いた。

「ま、とりあえず、頑張る！」

「頑張って！」

「応援してるわよ！」

双子（美穂と蓮は双子なのよ）が私の背中をバシツ！と、叩いてから自分の部屋に走って、行った。

痛いっつてば！

けど、明日は（毎日）頑張らなくちゃ！

私は、気合を入れて息をはいた。

わが家は4人家族。私に、お母さんに、双子の弟に、妹。

弟の名は蓮。妹の名は美穂。

私の家には、お父さんがいないの。仕事場に向かってる時に、交通事故で死んでしまった。すごく悲しかったな。そんなことを心のなかで語っていたら、私は、眠りに落ちてしまった。

私はこんな夢を見た。

ここは、病院。患者は死んでしまった。悲しい夢だ。彼女は、有里という名前の女の人だ。彼女は、がんばった。

「あなたは、自分に自信を持って。私がいなくても貰いて。挫けずに前を向いて。自分の夢だけを見て。夢を叶えた人だけが見えるものがあるわ。それを見てきなさい。それが私の願いよ。今までありがとう。元気で。ずっと、見てるから……」

そう言い残して、息を引き取った。悲しい、切ない話だ。私は、病院に行ったら、こういうシーンを見てこなくちゃいけない。見たくないのに。他の人たちもそうだろう。私も、頑張らなくちゃ！

そこでハッと目を覚めた。時計を見たら、3時。今日の朝の7時30分に病院に行かなくちゃならないの。やだ、私の目から涙が出ているみたい。泣いてたらしい。

「なんか飲も」

私は、つぶやいて一階に降りた。

誰もいないみたい。

その時、ガサツと音がして、キッチンを見ると（不気味）、

「蓮！」

蓮がいた。

「何してるの？ 探し物？」

「うん。いや、起きてしまったから。それで、暇になって何か食べようと思って……」

「うん。わかった。私も起きてしまったから、クッキーでも食べようか。私、ココアとコーヒーでも、沸かすから」

私はお湯を沸かした。

「蓮は、クッキー持ってって！」

「ラジャー！」

蓮がお行儀よく、返事した。

「ああ。クッキー食べるのなら私も呼んでよ！ 私、クッキー好きなの知ってるでしょ？」
美穂が2階から降りてきた。

「あら。そういうのには、反応いいのね」

私は苦笑。

「はい。ココア」

私は、二人の前にココアを置く。

「やったー！」

「ありがとう！」

私の前にはコーヒ―。苦くておいしいのよね。

「お姉ちゃん！ そろそろ、時間よ！ 着替えて！」

「え？ なに、どんな服!？」

「ええ！ 決めてなかったの？ じゃあ、一緒に決めましょう！
美穂と一緒に選ぶ。」

「この、ワンピースは？」

「なに言ってるの？ 病院よ。病院に、ワンピースっておかしいでしょ？」

「うう」

私は、けなされる。

「これなら？」

「うん。それなら、いいじゃない？」

私が選んだのは、ジーパンに白いシンプルな、Tシャツ。

「まあ、どうせ、白衣に着替えるけどね」

「とりあえず、行ってらっしゃい！」

私は、双子に押されながら、外にでた。

川は、半分こおって、もみじやイチヨウの葉がなにも落ちていない。もう、冬だなんて感じ。私は、冬が大好きなんだ。カニもさらに美味しく食べられるし、白菜のスープとか、そんなものが食べられて、とっても嬉しいの。

「ついた」

ここがF I X病院。この街で、すごく有名。ベットも千台くらいあるんだって。こんな有名な病院に私がいていいのか？

私は、思い切って、病院の中に入った。

「ええと、こちらへんが、資料室だったっけ」

私はドアを開けて、近くに来た人に声をかけた。

「あの。私、今日から、入らせてもらう、佐々木れいかです。宜しくお願いします」
頭をさげる。

「おはようございます。どうぞ、中に入って。ここが、佐々木さんの机ですね。色々書類にはんこなど、押してもらわなければいけません。わからないことがあったら、私や、ほかの人に聞いてください」

それだけ言うと、自分の仕事に戻っていった。

「えーと……」

私は、アンケートをとったり、はんこを押したりして、手続きは終わった。それだけで、もう、2時間以上時間が経過していった。いつまでたっても、あかねは来ないなあ。彩美も来ない。

「あら、ごきげんよう。私の机は、どこかしら？」

うわさをすれば！ あかねが、私のことをみた。

「あら、才能ないのにまだいたの？ 嫌になっちゃうわ。モチないからねえ」
ムカ！

「なによ。その言い方。モテないのは関係ないわよ。ほら、自分の席に着きなさい」

私は、あかねをにらんだ。

「やあね。こわいわよ？」

「ふん！」

私はそっぽ向いた。そんなことより、

「あの。書類は、全部できました」

私は、近くにいた、古来さんに言った。

「ありがとうございます。11時にあると、集まって、議会をするので、集まってください」

「はい。分かりました。」

私は自分の席に座った。

「れいか、ここ教えなさい」

「なんで、そう、上から目線なのよ？」

「あら、教えてくれないの？なら……」

ひい！　なんか、恐ろしいこと言われそう。わかったわよ……。

「わかったわ。ここが、自分の……」

私は全部、教えると彩美が入ってきた。

「あ、彩美〜！」

そう、彩美は、私の親友で、大好きなんだ。

「れいちゃん！　来てたんだね！」

「はい。書類。私が、お取り寄せしといたから」

私は、さつき、古来さんに頼んで、書類をもらったの。

「ありがとう〜！」

「彩美の席は私の隣ね」

「うん。ありがとう」

彩美が笑った。

「ねえ、彩美。彩美は、手術する看護師なの？　それとも、患者の見回りしたりする看護師なの？」

「うん。私は、手術をする看護師だけど、時間があったら見回りしたいかな？」

「私も同じよ。やった！」

腕を伸ばして、ジャンプした。

「あら。私も同じなのよ。偶然ね。私は、嫌だけど」

また、文句？　あきた！　でも、私どうせなら、あかねの秘密を暴いてみたいのよねえ。そうしちゃおうかしら？　私は、あかねにずっと、いじめられてきたから、してもいいわよ！

「あ！やばい。時間だ。急がないと！」

私は、集まりに遅刻しないように急いだ。

「お、お待たせしました」

私は、座った。

なんの会議だろう？
あのおじさん、髪の毛一本しかないみたい。ふふふ。サザエさんの波平さんみたい。

そんなくだらないことを考えてたら、もう、終わってしまった。これじゃあ、会議の意味ないよ！でも、このF I X病院って変わった病院ね。

普通の病院じゃないのかしら？

「あら、もう12時？ スケジュール帳と……。あつた！」

なにに？ 12時15分から、食事ができるのね。あと15分か。

彩美に知らせよつと！

「彩美〜！」

「うん？ なに、れいちゃん？」

「あのね、一緒にランチしようと思って」

「あ、わかった。12時15分からだね」

そして、15分後。私たちは、お弁当を食べ始めた。

「彩美のお弁当はサンドイッチなんだね」

「れいちゃんは、おにぎりの弁当かあ〜。美味しそうだね」

「ありがと！」

私たちは笑った。

「ねえ、聞くけどさあ。あんた、好きな人でもできた？ あの先輩、かつこよくない？」

「うん。そうだね」

「あんたは、いないの？」

「いたらどつくに、話しているよ」

「じゃあ、見つけたら話してね！ ふふ、いい気味」

「え？」

私、最後の方は聞こえなかったんだけど。笑ったとこまでしか……。

「まあ、私はいないけどね」

「あはは」

「じゃあ、私。仕事するから」

「うん」

私は、パソコンに目を向ける。

え〜と、この人は、骨折で〜。なるほど。

新井さんって人は、脳出血なんだ、お気の毒に……。早く治さないと、脳がえらいことになっちゃう。つて、その手術は、私がするの？

今日は、患者について、調べなきゃいけないから、そんな仕事はないの。

「熱心だね。わからないこととか、病院のことだったり、悩みがあったりしたら、相談してね。相談にのるから」

「はい」

振り向くと、男性がいた。その人は、南雄と名乗った。

色々教えてもらっていたら、なんだか、親しくなってきたかも。

「あの。雄先輩と呼ばせていただいてもよろしいですか？」

いきなり、言われても、困るよね。

「うん、別に構わないけど？ 佐々木さんは、なんて呼ばれたい？ 佐々木さん、みんなからは、れいちゃんって、呼ばれているんだよね？」

「あ、はい」

私は、雄先輩に呼ばれるだけで、キュンとしちゃうので、名など、なんでもいいです。

「あの。私、みんなからは、れいちゃんと呼ばれていて、その、れいちゃんと、呼ばれるのがなれているので、れいちゃんでもいいです」

「わかった。今度からは、佐々木さんじゃなくて、れいちゃんって、呼ばせてもらうね！ あっ、そうだ。

れいちゃん、友達として、連絡先、交換しようよ」

「わ、わかりました」

私たちは、交換する。

「これで、OK」

雄先輩がうなずいた。

ああ、ドキドキする。私、雄先輩の前にいると、心が華やかになる。本当の素直な自分になれるんだ。心から尊敬する先輩。私の憧れ先輩。見るだけで、好きになる。

きゃあ〜！ 恥ずかしい！ 雄先輩の前で、小躍りしちゃうそう！

って、ううか。私、完全に好きになってない？ 雄先輩を。あわわわ！ 私、顔にでてないかな？ 出たら、やばい。恥ずかしい。

まあ、こんなブスの人に好きになられても、困るよね。恋愛経験ゼロな私。初恋も今な私。ブサイクな私。ああ、もう嫌になっちゃう！ 顔だけに……。

「あらまちゃん！」

私は『あらまちゃん！』って、叫んでしまった。

関係ない話をするけど、私のあだ名はいっぱい、あるんだ！

例えば、『ブタゴリラ』ほかには、『バットでぶつとばすゴリラ』とか、『歯になんかつまったさん』とか、ひどいあだ名がいろいろあるんだ！ あ、あというの忘れてたけど、『鼻になんかつまったさん』って、あだ名もあるんだ。

って、いけない、いけない！ 話、進めなくっちゃね！ では、どうぞ！

「ねえ、彩美。私のあだ名ってなに？」

「う〜ん。一番、れいちゃんのなかで、有名なのは、鼻になんかつまったさんだよね！」

「ねえ、ひど〜い！ 親友でもそんなこと言うんだ？」

彩美は、一瞬、は？って、顔しかけど、すぐにもとの顔に戻った。

一週間後。私は毎日、病院へ行って、働いているの。それで、この間、一回だけ手術を試みたんだ。すぐに治る病気。

「あらあ、ブタゴリラ。ごきげんよう」

あかねが後ろから、声をかけてきた。

え？　なんでそんなあだ名、知ってるの？

「え！　なんでそのあだ名を!?」

あかねがニヤリと笑った。

「ふふ。まあ、あなたに話す価値ないわ」

え？　なんか、きになるじゃん！

「あなた、最近、あのイケメンの男に近づいてない？」

「へ？」

私はポカンと口を開けた。

「私、今度から雄さんと親しくなろうと思ってるの。私、美人だから、すぐに、付き合っちゃうわ！　あんたはそんなの、ないだろうけど。あんた、絶対に私の応援、しなさいよ！」

言い終わると、あかねが去っていった。

うわ！　なにあの妄想？　どっから生まれたわけ？　信じられない！　しかも、ブタゴリラだって！　私、家族と彩美にしか、そのあだ名、言っけないよ！　なんで？

「ふう〜」

ため息をつく。

「困ったことなら、言ってよ。なにか困っているの？」

振り向くと、雄先輩が立っていた。

「は！」

私のほおが真っ赤になっているのがわかる。

このままだと、心臓が飛び出て、死んでしまう。あらら。

「いえ、なんでもありません！」

「そう、わかった。なんでも言って」

雄先輩が笑うと、そのまま、去っていった。

そう、この笑顔も好き！　大好き！　私、完全に好きになった。でも、私が好きになったら、困るよねえ。

「彩美〜。私、完全に、好きになっちゃった！」

「うん、いいじゃない」

彩美がニヤリと笑った。

「しかも、なんにもしてないのに、雄先輩に近づいちゃダメ！　って、言われたんだよ？　信じられない！」

「まあ、そうよね。あかねは、ひどいわよね？」

「うん、めちゃくちゃ、ひどいわよ！」

好きになるのは、自由でしょ？

「う〜ん。……悪くないと思うけど……」
「え？」

「う〜ん。なんでもない」

最後のほうは、あまり聞こえなかったけど。まあ、いつか。

「う〜ん！ 仕事、終わった〜！」

私は、腕を伸ばしながら、家へ歩く。

家では、美穂と蓮がうるさいだろうな〜。

私は、いつも、7時に仕事が終わるから、あいつらは、まだ、起きているの。

「ただいま〜」

「おかえり〜！」

双子が玄関にすつとんできた。

またか……。

「お姉ちゃん！ 仕事はどうだった？ 雄先輩とは、どうだった？」

それを聞いただけで、私の顔が真っ赤になる。

私はこの間、双子（美穂と蓮）に話したんだ。雄先輩のこと。

きやあ〜！ 自分で思って、テレる。

「ふん。話すもんか！」

「ええ〜！ ひど〜い！ 話してくれたって、いいじゃない！」

美穂のほおがふくれる。

かわいい！ このムクれたブクブクのほっぺ！ う〜ん。たまらん！

「……かわいい」

「ん？ そんなことより、話してよ！」

「しょうがないわね〜、蓮くん。話してあげるわよう〜」

「なんだよ、その猫の声」

蓮が呆れる。

「あのね、実は……」

私は、今日あったことを全部話す。

「え〜！ お姉ちゃん、かわいそう。そして、あかねちゃん、ひどい！」

「でしょ〜？」

「そうよね。何か雄先輩を取られないようにしなくちゃね」

「う〜ん」

私は、腕を組んで考えた。

う〜ん。

「あ！ そうだ！」

「どうしたの？ 蓮」

「あかねちゃんが付き合う前に、付き合っちゃえば？」
「え！」

私の顔が赤くなる。

「いいわね」

「ちよ、ちよっと、美穂まで……」

「じゃあ決まりだね！」

蓮がOKサインした。

「そうね。お姉ちゃん、頑張りなさいよ！」

「ひえ」

私のがくりと、頭が下がる。

「もう、寝る時間よ！」

お母さんが叫ぶ。

「は〜い」

双子と一緒に寝室へ向かった。

私はベットにダイブする。

「ふあ〜。眠たいけど……」

「けど？」

双子が首をかしげた。

「ミステリー小説の犯人を突き止めるのをみたい！」

私は、自分の胸を左手で押さえ、右手を上には伸ばした。

「うわ。寝る時間なのに、近所迷惑よ？」

「耳痛い！ 鼓膜や破れる！」

双子が耳を押さえた。

「す、すみません。でも、ミステリー小説、よみ終わってからね！」

私は、頭を下げた。

「それはダメよ！ お母さんが許しませんよ！」

お母さんがいつの間にか、私たちの部屋に入ってきた。

「お母さん！ いつの間にか!？」

双子も私も、ビククリぎょうてん！

目を丸くしていたら、お母さんに背中をバシッ！と叩かれてしまった。

いてっ！ もう、お母さん、空手習ってるんだから、手加減はしてほしいわよ。

「もう！ 明日も早いでしょ！ もう寝なさい！ れいか！」

へ？ なんで私だけ？

あ！ あいつら、もう寝てる！ 私を囿にして！ もう、許さん！

「わかった、わかった。もういいから」

私は、うなずきながら、あっち行け！と、手で合図した。

お母さんが出て行ってしばらくしてもなかなか、寝れなかった。

「お姉ちゃん、眠れないんだ？　じゃあ、私たちの歌声を録音した、CD貸してあげる」

「え？　あんたたちの歌声なんか、ききたくないよ！」

「じゃあ、聞かないんだ？　いいよ。もう、一生かしてあげないわよ！」

美穂がCDを片付けようとした。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待って！」

「何よ？」

「かしてください！　さっきは、ゴメンなさい！」

美穂は、一瞬困ったような顔したけど、ニヤリと笑って、CDをかしてくれた。

美穂から、CDをかしてもらうと、「ありがとう」とお辞儀をした。

美穂からもらった、CDをきいてみた。

「ラ〜ララ〜ラ、ラ〜ララ〜ラ、ラ〜ララ〜ラララ〜、ラ〜♪」

美しい、歌声だ。歌詞の文字が滑らかに溶けていくかんじだ。

「綺麗な歌声……」

私は、いつの間にか、眠りに落ちていた。

② 彩美の正体！

「コッココッコ〜！」

目覚まし時計が鳴った。

「うるさいなあ！」

私は、ヌツと手を伸ばして、乱暴に、目覚まし時計をとめた。

「お姉ちゃん、乱暴！」

「私は、乱暴って名前じゃない！」

「だから、名前じゃなくて、乱暴にとめんなって、言ってるんだよ？」

蓮が口をとがらせた。

「もう！　そんな暇ないでしょ！　急いで行かないと！　お姉ちゃん！」

美穂が、私にどなった。

「へい……、って、あんたたち！　いつの間に起きていたのよ？」

「ずっと、前にー！」

蓮が言った。

「はあく。もう、準備してね」

美穂は、呆れたのか知らないけど、それだけ言い残して、出て行った。

「ま、とりあえず、せいぜい、頑張れよ！」

蓮は、私の肩をバシッと叩くと、美穂について行った。
痛いし……。なんで、上から目線なのよ？

病院に着くと、彩美が駆け寄ってきた。

「れいちゃん！ おはよ！」

彩美、いつもながら、テンションマックスだわ。

「佐々木さん！ 小山さん！」

「はい？」

杉さんが走って、私たちの方へ、すっ飛んできた。

あ、言うの忘れたけど、彩美は、小山彩美っていう名前なの。

「緊急事態です。杉山さんが……。このまま手術をしなければ、命のききが、迫ってくると思います。とにかく、はやくっ！」

「はい」

私と彩美は、手術室に向かった。

「失礼します！」 「失礼します！」

私たちは声をそろえて、なかに入った。

「名前を。私は、菊池レオです。次」

「はい。鈴木アリスです」

「次！」

「あ、はい！」

私の番が来た。

「あ、えくと、佐々木れいかです」

「次！」

「小山彩美です」

「次！」

「朝野葉あかねです」

うっ。聞いちゃいけない名前を聞いてしまった。

あかねが私の顔を見てニヤリと笑った。悪魔の笑顔。

ふくはくふくは。心をよまれてないか、心配だわ。あれ？ 何か、企んでる？

「この患者は、脳出血だ。手術、始めるぞ！」

「はい！」

みんなの声がそろった。

手術の始まりは、自己紹介から始まるの。意外でしょ？ 私も最初は、不思議に思ったんだ。この患者は脳出血か。ものすごく、命に関わるなあ。この病気になるなんて……。かわいそう。

でも、私が必ず、助けるから。命を救うから。あなたの幸せを取り戻すから。待っててください！ 杉山さん！

私は、心のなかで、叫んだ。

「道具を全部、確認できたか？」

「はい！」

「よし。みんな、お疲れさん！」

リーダーが言い終わってから、私は飛び跳ねた。

「やった〜！ 手術成功だつて！」

彩美も喜んでる。

「あらあ、そんなことではしゃいでいるの？ まだまだ、お子ちゃまね〜」

ムカツ！ あかねだって、この間、はしゃいでたじゃない！ イラつく！

ど？ 帰ったら、双子に話して、ぶちまけてやる！ 待ってるよ！ 双子？ こういう時は、あかねってい

うのかな〜？ ん？

「うう〜、お腹すいた」

ああ。本当にお腹すいたわ〜。

私は、お腹を押さえながら言った。

「そうね。お腹すいたわね」

彩美も、うなずいた。

「あの子、彩美」

「ん？」

「一緒にランチしよう！」

「うん。もう、12時15分だもんね」

私たちは、お弁当を用意すると、

「いただきます！」

と、挨拶した。

「あのさ〜、あかねのやつさ。なんか、企んでいそうだったよね」

「え！ そ、そうなんだ〜」

あれ、なんか彩美、ごまかしてる？ なんか怪しい〜。

「なんか知ってるの？」

私は、きいてみた。

「あ、え、えつと〜、何にも知らないわよ？」

「へ〜、そうなんだ〜。親友なのに教えてくれないのね〜」

私は、笑った。

「……チツ……」

ん？ なんの音？

「ん？」

「あ、あ、なんでもない」

彩美が自分に言い聞かせるように言った。

「ねえ、それよりさあ、私、完全に、雄先輩のことを好きになったかもしれないの。あのね、この間、お誕生日と血液型を教えてもらったんだ。3月11日なの。血液型は、A型だった」

「へへ、そうなんだ」

彩美が、怪しそうに笑った。

「ふふ」

「ええ？ 何がおかしいの？」

「ええ。なんでもないわ。ふふふ」

「は？」

彩美、何を言ってるの？

「あははは、その顔、ちよつと笑わせないでよ！」
「んん？」

「れいちゃん、お猿さんみたいな顔してたよ」

「ええ？ やだ、恥ずかしい」

私は、顔を押しえた。

「とにかく、頑張つてね！ 恋を」

うう。それを言われると、心臓が飛び出てくるじゃない！

「とりあえず、ごちそうさま！」
「ご、ごちそうさま！」

私たちは手を合わせて、頭をさげた。

「あ！ 用事を、思い出してしまった。れいちゃん、ちよつと、行ってくるね」

「うん。じゃあ、行ってらっしゃい」

私は、彩美に手を振った。

彩美がどっか行って、1分くらいたつと雄先輩が私の机の前に通りがかったから、思い切つて、声をかけてみた。

「雄先輩！ こ、こんにちは！」

「ああ、れいちゃん、こんにちは」

「あの……。今度、一緒に、お食事してもいいですか！」

顔が真っ赤になつちやう。

私つたら、いきなりそういうことは、言っちゃダメよ！ 私は、自分に言い聞かせた。
でも……。実は行きたかつたから。

「は、はあ。僕でいいなら。こちらこそ、お願いします」

「あ、はい！ いきなり、お願いして、す、すみません！」

「大丈夫。逆に、嬉しいから。それで、いつにする？」

「ああ、休みの日をお願いします」

「わかつた。僕、ちよつと、まだ終わらない仕事があるから、行くね！」

「はい！ お邪魔してすみません！」

雄先輩が去っていった。

あゝ、あの顔立ち。かっこいい。目がキリツとして、顔がきれいに整ってて、あの背の高さ。あゝ、心の恋のポエムが止まらない！

「彩美〜！ あのさ、休みの日に雄先輩とランチに行く約束したの」

私は、用事を済ませた彩美に声をかけた。

「よかつたじゃない！ いいチャンスよ」

「ありがとう。私、心臓ばくばくしたよ」

「勇気出せてよかつたじゃない。休みの日って、いつ？」

「え〜と、たぶん、5月1日だと思う。私たち休みだし」

「ふ〜ん」

彩美がえらそうに、腕を組んだ。

「ふ〜んって、なによ。軽く傷つくぞ」

「ごめん、ごめん。ふふ」

彩美が甲高い声をあげて笑った。

「だから、なんで、笑うの？」

「いや。髪にゴミが付いてたから」

「え？ どれどれ？」

私は、髪をさわって、ゴミを取ろうとする。

「違うよ！ そこじゃない。私が取ってあげる」
バシッ！

「いてー！」

いきなり、彩美が私の頭を叩いた。

イラッ！

私は彩美をにらんだ。

「なによ〜。たまたま当たっただけじゃない。嘘だけど」

「嘘つき！」

私たちは、笑った。

数日後。

私は、パソコンに向かって、キーボードを打った。

カチャ、カチャ……。

キーボードを打った音が出る。

「あら、まだ終わってなかったの？ 遅いわね〜。牛の歩みよ！」

うっ、あかねが声をかけてきた。相変わらず、イヤミ。

「ねえ、そのうえから目線、やめてくれない？」

「え？ いやよ。あんたより、上だもの」

「誰が決めたのよ？」

呆れる私。いつもこんなだから。

「ねえ、あんた」

「は？ なに？」

「なに、マヌケな顔してんのよ？」

「してないわよ！」

私は、言い返す。

「ここからが、本題だけど……」

あかねが言いだす。

「へえ？」

やだ、マヌケな返事をしてしまった。

「今度の休みの日、あんたと、雄先輩と一緒にダメよ！ なに勝手に、約束してんのよ？ あんたは、私の

ことを邪魔しないって、約束したでしょ？ 私も、連れて行きなさい！ いいわね？」

え……、なんで、あかねは知ってるの？ 私は、彩美と双子にしか言っていないのに。

あ！ 盗み聞きしてたとか？ まさかね。

「しかも、私のことを悪く言っているでしょ？ 許さないわよ！」

「はあ？」

なんで、あかねが知ってるの、は？

「で、いつ行くの？ 決まったら、教えなさいよ！ ランチに行くんでしょ？ 私は、雄先輩のとなり。あ

んたは、私の前に座ってなさい。いいわね？ あんたは、口出し、禁止よ！ そうじゃなかったら、ただ

じゃおかないからね！」

そう言って、去っていった。

「はあ？ 意味わかんない！ 信じられないわ！ 私は、彩美と双子にしか、言っていないのに」

そもそも、なんで、私のあだ名も知ってるし、雄先輩とランチをすることを知ってるの？ 意味わかん

ない！ 信じられない！ なに、ずうずうしいにも、ほどがあるわ！ほんと、許せない。も、もしかして、

彩美！ いや、まさかね。そんなのは、ありえないわ。でも、もしそうなら、どうしよう。

私の予想は、彩美。なんか、あやしいと思ってたんだよね。ずくつと。

「ねえ、彩美。どういうことよ！」

「はあ？」

手術を終えた私は、彩美に抗議した。

「どうゆうことよ！ なんで、あかねは知ってるの？ 彩美が言ったに決まってるでしょ！ ちゃんと説明

しなさい！」

私は、ついに言ってしまった。

は！ 私ったら、なに言ってるんだろう？

でも、あかねに言えるのは彩美しかないんだもん。

でも、本当に言ってしまった。

私は手で、口を押さえた。

「そうね。ばれてしまったら、仕方ないわよね……」
うそでしょ。本当に？ だれか、嘘だと言って！

「私は、あなたの親友なんかじゃないわ。あんたみたいな、ブスと一緒にされたくないわね。私は、友達の手をさせていただきよ。それで、あかねに伝えていただけよ。私は、あんたのことなんか、大嫌いだしね。私は、あかねの味方だから。あんたとなんか、相性が合わないから、友達になんて、なれないわよ！」

はあ、今なんか、すごく嫌な言葉を言われた気がする。ブス？ 彩美がそんなことなんて、言ったのを初めてきいた。

前まではずっと、信頼できていたけど、やっぱり、彩美だったのね。やっぱり私は、ひとりぼっち。私つたら、もう、完全にひとりぼっちよね。私の味方してくれる人なんていない。きつと、双子も、私の味方ではないだろう。

やっぱり、ブスなのがいけないのかなあ？

私は腕を組んだ。

あの時は、楽しかったな。ランチと一緒に食べた時。仲良く遊んだ時。小学校のときから、ずっと一緒だったよね。笑ったよね……。

私は、彩美との思い出を思い出すたびに心がおれる。信頼してきたのに……（前までは）。私なんかより、ずっと、あかねの方がいいよね。それは、わかっている。悲しいな。むなしいな。悔しいな。ずっと、信頼し

てきた、私が、バカだった。

涙が出てきちゃう。みんなは、自分だけ、よければ、いいと思ってるよね。私は、ずっと、彩美を待ってたのに……。追いついてきたのに……。もう、お別れよね。

バイバイ！ 今までありがとう。

今日は、もうダメ！ 早退しよう！ それがいい！

「あの、今日は、ちょっと、頭が痛いので、早退します」

「わかりました。お大事になさってくださいね」

「ただいま」

私は泣きながら帰ってきた。

「おかえり！」 「早かったね！」

いつもながら、明るいわ。でも、今は、その明るさが、苦しい。胸が痛い。
「ど、どうしたの？ 泣いてるの？」

ぎくつ、私、泣きながら帰っていたの？ 双子に見られて、恥ずかしい！

「あかねちゃんか、彩美ちゃんか、雄先輩とかと、なんかあったんでしょ？」

ばれてたんだね。双子、するどい。

「あんたたち、かんがいいわね」

自分がなさないわ。

「なんで、人の心を読めるのよ？ あんたたち、エスパーなの？」
「いや。べつに。でも、顔に書いてあるわよ？」

美穂のツインテールの髪がゆらりと、揺れた。

「本当に！ お姉ちゃん！ それだけ、わかりやすいんだから、雄先輩にも、好きです！ って、ばれちゃうよ！ 気をつけないと！」

蓮に心配されてる。姉の立場ってないの？

「話してみてよ！」

双子が目をくりくりさせた。

そんなことしたら、話さないといけなくなるのよ！

「じゃあ、話すね……。あのね、彩美がいるでしょ？ 私が話していたことを全部あかねに伝えていたのよ！信じられないでしょ？ ずっと信賴してきたのに……。私の味方なんて、いないんだ」

ガクリッ。私の頭が折れたように思える。

「何言ってるのよ！」

「僕たちが味方でしょ？」

双子が交互に叫ぶ。

「でもね。あんたたち、私のことバカにしてるでしょ？」

本当に！ 私のことをいつもバカにして。

「うん。私は、バカにしてないわよ。ただ、一緒に悩んだり、協力してあげているだけよ」

美穂が頷いた。

「そうだよ。美穂の言う通り。僕たちは、協力してるだけ。心配ないでしょ？」

蓮が天井を見上げた。

「そうよね。あんたたち味方なのかしら？ まあ、いいわ」

次は私が、双子をバカにした。

「だから、味方だって」

「そうよ。いつでも、味方だから。私たちは」

あれ？ 今日、やけに優しい。でも、なんか、企んでそうで、不気味でもある。

「なんか、不気味。双子が笑顔なんて」

「あら。私たちは、いつでも、スマイルよ」

美穂が人差し指でほっぺにさした。

やっぱりなんか、不気味。

「明日。大丈夫かな？ ちゃんと、仕事できるかな？」

うん。それが問題。

「ねえ、私はそう思わないほうがいいと思うわ。だって、親友がいなくなったからって、仕事をしないの？

親友は仕事に関係ないと思う」

あつ。親友は仕事に関係ない……。そうよね。親友は、無関係よね。しかも、もう、親友じゃないもの。親友なんていないもの。双子がいるんだもの。双子の言う通り。そう考えればいいんだわ。

「双子、ありがとね。やる気出た！」
「なら、よかったわ。明日もお仕事がんばってね！」
「うん」

次の日。

私はボサボサ頭のまま、朝食のクロワッサンにかぶりついた。

「お姉ちゃん、だらしないわよ？」

「本当に」

もう。うるさいんだから。

「うるさい。朝だから、しょうがないわよ！」

双子に小さく怒鳴った、私。

「や〜ね〜。朝からうるさいわよ」

美穂が上から目線で言った。

こっちのセリフだ！って、言いたいけど、そこはがまん。だって、双子は12歳だもの。怒鳴りすぎたら、可愛そうよね。

でも、少しでも言っておこう。

「もお〜、朝からうるさい〜！」

私はそれだけ言っておいて、準備が終わったら、外に出た。

「あったかい」

私はいつも歩きで病院に行ってる。

まだ車の免許、とってないのよお〜！

ああ。雄先輩に会いたい。けど、あかねと彩美もいるもんなあ〜。

病院で、こんなすてきな、雄先輩に会うとは思わなかった。嬉しすぎる。

けど……、雄先輩は絶対に誰かが狙っていると思う。だって、あかねも狙っているし〜。私は積極的じゃなく、消極的だし。ブスでスタイルも悪くて。みんな私に近づいてほしくないのよ。いやなのよ。

あかねにも彩美にも言われたことがあったけ。

もう！ 思い出しただけで、腹が立つ。

あんな言い方じゃない！

それにしても今日は、だいぶ早く家を出てしまった。

「あれ！ ここはどこ？」

あれ？ 本当にいつの間にか、知らないところに来ていた。

私はほおに手をあてる。

「どこ〜。私、どこにいるの〜！」

私の後ろには、豪邸があることに気づいた。

「行ってきます」

誰の声？

私は振り向いた。

「え！」

私の顔は真っ赤になる。こんなところにいるなんて。

「ああ、れいちゃん。おはよう！」

「あ、あ、おはようございます！」

ついで、あがつちゃう。

そこにいたのは、雄先輩だった。

「ねえ、ランチ楽しみだね！」

「そうですね。どこに行きましようか？」

「そうだ、あかねも呼ばなくちゃ。」

「あの。ちなみに、ここはどこなんですか？ 私、ボーっとしてたら、こんなところに来ちゃったんです」

私ってば、バカ、バカ、バカ！

バカ丸出しじゃないの！

「え？ 知らないで来ていたの？」

「はい……」

私の顔がさらに真っ赤に染まっていく。恥ずかしさと、好きらしさ？

「じゃあ、一緒に病院に行こうか。ここは、僕の家だし」

「へえ。って、ええ！」

私ってば、びっくり仰天！

「ごめんね。家を紹介してなくて」

「いえ、いえ。そんなことないです。豪華な家ですね」

雄先輩の家を見上げた。

「そんなことより、行かなくちゃ」

「ああ、そうでした！」

二人で並んで、歩き出した。

「あの。あかねも呼んでも、いいでしょうか？」

「なんのこと？ ああ、ランチのことね。べつにいいけど？」

雄先輩は、ちよつと困った顔をした。

「仲がいいんだね」

雄先輩が苦笑した。

「仲がいいのか、悪いのかあ」

雄先輩が別人のようにいきなり目つきが変わって、真剣な表情をした。

「ねえ、れいちゃんって、あかねちゃんとランチをするのは、どう思う？」

「え、あ。べつに、なんとも思ってないです。雄先輩がよければ」

そうじゃないよ！ あかねとなんか、食べたくないよ！ けど、私が、悪い子だと思われちゃう。

「明日ですよ。ランチって」

「そうだね。あかねちゃんも来るんだよね」

「そう。明日が当日のランチなの。」

「きよ、今日、あかねに明日、『ランチをする』と伝えておきますね
いやだなく。」

「ねえ、明日になったよお。ランチ」

「そう、わかったわ。で、どこのレストランなのよ？」

「えっと、緑山レストラン」

「わかった。私の車で送るわ。集合場所は駅ね」

「は……はい」

私はうつむく。本当は二人だけで行きたかったのになあ。

「雄先輩！」

あかねが雄先輩を呼んだ。

「ランチは私の車で安全にレストランに向かいますので、どうぞ、車でレストランにおくります」

「え？ ああ、いいよ。歩きで」

雄先輩は首をふった。

「いえ、足を疲れてしまったら困るわ。車で送ります。駅で待ち合わせしましょう。では」

あかねが自分の席について、仕事を始めた。

「あ、あのう」

雄先輩が何か言いたそうだった。

「ただいま」

私はドアをグッと押して、中に入った。

あゝあ。絶対に明日は嫌なことになりそう。

今日の仕事は長引いたから、遅くなっちゃった。

今は10時。もう、美穂と蓮は寝ているだろうなあ。

私は靴を脱いで、廊下を歩いていった。

「美穂たちは……」

私はそうつと、双子部屋のドアを開けて、美穂たちが寝ているかどうかを確かめた。

「うん、寝て……ないっ！」

ええ！ まだ、起きてたの？

「あつ。お姉ちゃん、おかえり」

美穂が手をふった。

「今日は遅かったね。お疲れ」

生意気な。

「もう！ お疲れじゃないよ！ あかねが本当に……。もう！ なんてあかねまで、一緒なのよ！」
本当に！ なんてあかねも一緒にランチしなければいけないのよ？ もう、二人きりが良かった。あくあ、
彩美に言わなければよかった。

「で、あかねちゃんの車で一緒に行くことになったんでしょ？」

美穂が言った。

「え！ なんて、そんなことがわかるのよ？ あんたたち、勘がいいわね
まじで！ この人たち、怖いわ！」

「ひひひ」

蓮が不気味に笑った。

「てっ、いうか、なんであんたたちが、まだおきてるのよ？」

そう、そこが気になっていた。

「それは、お姉ちゃんを待っていたんだよ」

うそいえ！

「ええ？ さっき、二人でトランプしてたのを見たけど？」

「ぎくっ。ううん、待っていたんだよ」

蓮が言った。

「ちよっと、うそ下手すぎっ！」

美穂が小さな声で蓮に怒鳴った。

「ご、ごめん。ごめん」

蓮が手をすりすりして、謝った。

「ん？ なんか言った？」

私には聞こえなかったぞ！

「いえいえ、それより、明日のために、寝ましよう！」

美穂が手と手を合わせ、顔の横に並べてニッコリ笑った。

「そ、そうね。美穂、明日のコーデ、教えてね！」

「うん」

美穂が頷いた。

「ふわぁ。なんだか、眠くなってきた。おやすみ」

私は双子に手をふって、自分の部屋のベッドに寝転んだ。

③ 雄先輩とデート！

パツポ、パツポ、パツポ、パツポ……。

私の耳元で目覚まし時計が鳴る。

「も〜う。うるさいなあ〜」

目覚まし時計の音を変えたのに、もお〜う、うるさい（牛かいっ?）。

「もう！ わかったから、起きるって！」

私はガバツと起きあがって、目覚まし時計を止めた。

「ふわあ〜」

私は腕を伸ばし、スリッパを履いてリビングに行った。

「おはよう。お母さんたち」

そう言っつて、ソファーに寝転んだ。

「もう、二度寝はダメよ。朝食ができたから、食べなさい」

お母さんに叱られた。

「お姉ちゃん、今日はランチに行くんだから、身だしなみを整えないと。10時から、会うのでしょ？」

美穂に言われてハツとした。

「そうだ！ 今日は雄先輩とランチに行くんだった。」

はあ〜。すっかり忘れてた。こんな大事なことを忘れたらダメだ。

もお〜う。私つてば、バカ、バカ、バカ！

私は、交互に自分の頭を殴った。

「はあ〜。仕方ない。よいしょつと」

私はため息をつき、仕方なく起きあがって、イスに座った。

「わあ〜。私の好きな、目玉焼きパンだ！」

リビングの机にサラダや、オムレツ。私の大好物の目玉焼きパンまで！

「珍しいね。いつもは私が嫌いなジャムパンなのに……」

そう言っつと、お母さんが一つに束ねた髪を揺らして笑った。

「だつてえ〜。今日、雄先輩と一緒にデートでしょ？」

「え！」

なんで、お母さんが知ってるの？ しかも、デートだつて。

「ねえ。なんで、お母さんが知ってるの？」

私は美穂の耳に小声で囁いた。

「ん？ 私、何にも知らないよ」

「え？」

私はポカンとした。

美穂の仕業だと思っつていたのに。

「じゃあ、蓮？」

私は蓮にきいてみた。

「違うよ」

蓮は卵スープに口をつけた。

「お母さん。なんで、ランチすることを知ってるの？」

「あかねちゃんから、電話で知った」

お母さんがすまし顔で言った。

「うげえ。あかねから？」

あかねのやつ。

「あかねちゃんが付き合ってる、雄先輩も一緒なんでしょ？」

えっ、あかねって、雄先輩と付き合ったの？

うそつけ！ あんな性格悪い子と付き合えるもんか！

午前9時21分。

「美穂！ そろそろ、コーデを選んで！」

「は！い！」

私は美穂を呼んだ。

「ええっと……」

この組み合わせは……。な、ないな。

「ランチだから、さわやかがいいわね」

美穂がスパッと服をとった。

「ホワイトTシャツに、この水色のロングスカートはどうかしら？」

美穂が私の方をみた。

「うくん、この服だと、ポニーテールに水色のリボンよね。で、あとは、茶色のヒールに目立ちにくいピアスをつけるといいわ。あっ、ポニーテールはヘアアイロンもしてあげるわね」

ううう。話が長すぎて耳に入らない。

それに気づいたのか、美穂が気をつかってくれた。

「あっ、ま、まずは、この服に着替えてね」

私は言われたとおりに服に着替えた。

「お姉ちゃん、次はここに座って」

美穂が指で指示した。

私は鏡の近くに座った。

「じっとしててね」

美穂が私の髪をといだ。

「いたくない？」

「うん。別に」

気がきくじゃない。

ぐいつ。美穂が私の髪をポニーテールに仕上げていく。

「今から、ヘアアイロンするから」

美穂が温めたヘアアイロンで、私のロングヘアの髪をまいていく。

「まけたから、リボンをつけるから。そしたら、ピアスを選んであげるわ」
美穂がリボンをまいた。

「ねえ、お姉ちゃん。ピアスの箱を持ってきてくれない？」

「え？ あ、うん」

やばっ、ちよつと寝てたかも。

「う〜ん、どこにしまったかなあ〜？ あ、あった！」

引き出しの中に入っていた。

「このピアスがいいね」

美穂が選んで耳につけてくれた。

「そ、それより、早く行かないと！」

今は午前9時52分だ。あと、8分しかない！

「でもさ〜。駅まで、3分で着くじゃん」

あ、そうか。

「でも、早めに出たほうがいいわね」

美穂の髪が揺れた。

「玄関に行きましょう！」

私は玄関に向かい、美穂に選んでもらったヒールを履いて、外に出た。

「ふう〜」

深呼吸、深呼吸。

私は駅の前に来て、深呼吸をした。

雄先輩が駅の前でスマホをみながら、待っていた。

ドキドキ。胸が高鳴る。

頑張れ〜。落ち着け。よし！ 歩こう。

「あ、あの。雄先輩」

私は思いきって話しかけた。

「あっ、れいちゃん。あかねちゃん、もうすぐ来るってラインにかいてあった」

「そ、そうなんですわね」

なんか、あかねに雄先輩を取られたみたいで、なんか、シヨック。

まえに、あかねが強引に雄先輩とラインと電話番号を交換してたんだよ？ ひ、ひどくない？
かっこいい！

今日の雄先輩の姿は、緑色のキャラクターの絵が描いてある「シャツに青色のジーンズだ。

「あっ、あかねちゃんだ」

雄先輩があかねの車に手をふった。

いいなあ。私もあんなふうに手をふってもらえたらなあ。

「……こんにちは」

私は車から降りてきたあかねに挨拶をした。

今日のおかねの服は、ふんわりしたワンピースに茶色のチェック柄。ワンピースから伸びた、すらりと白い足に、カールしたロングヘアの髪。まさに、みためは天使だけど、中身は、あ・く・まのあかね！

「あら！ 雄先輩。ご丁寧な手をふってください。ありがとうございます。私の運転手さんが、安全に緑山レストランまで、おくるわ。では……」

あかねがなにか言いかけたとき、私は、思いきつて、口をはさんだ。

「あ、あの。まだ、ランチの時間が早いと思うから、どこかの広場とかに行きませんか？」

「いいねえ。この近くに広場があるから、紹介したいなあ」

雄先輩が空を見上げた。

「いいなあ。私もいきたいなあ。ねえ、雄先輩。私も行ってもいいかしら？」

あかねが甘えるように言った。

ダメ！ 私は却下！

「うん。さあ、こっちに来て」

右折して左折して、右折して右折して。

住宅街を抜けてしばらくすると、小さな公園が見えた。

「あそこ。僕が幼いころ、よく遊んでいたんだ。なつかしいなあ。あのときは、じいちゃんとたくさん遊んだなあ」

雄先輩が過去を見るような目をした。

「そして、そのおじいさんは、どうしたのですか？」

あかねがドサクサに紛れてきいてきた。

「おじいちゃんは、その後。交通事故で死んでしまった。おじいちゃんは何にも悪くないのに」

雄先輩のほおに涙がこぼれ落ちる。

「ハンカチです」

私はハンカチを差し出した。

「ありがとう。僕が学校に行っているとき、おじいちゃんは、僕のお母さんにおつかいを頼まれたんだって。おじいちゃんが横断歩道を渡っていたとき、突然、車が襲いかかってくる、死んでしまった。その車の運転手は、おじいちゃんが悪いって……。赤信号なのに出てきたって。でも、本当は車の方が襲いかかってきたんだって」

「そ、それは、ひどいー！」

私のほおが膨らんだ。

「そ、そうなんですわ……。う、うえ〜ん」

あかねも泣いた。

でも、私には、嘘泣きのように見えた。

「あ、ごめんね。こんな話して。なんか悲しい話だよ。せつかくの楽しい休みだから、もっと、明るくハツとしよう」

雄先輩に笑顔が取り戻った。

でも、あんな雄先輩、初めて見た。

なんか、ドキッとしちゃったな。

でも、あかねの嘘泣きなんか可愛くないよお〜だ！

雄先輩、こんなずる賢いやつなんかにキュンとしちゃ、だめだからね！

「あつ、もう、こんな時間。そろそろ、ランチに行きたいです」

私は話をそらした。

「そうね」

あかねも頷いて、私と雄先輩の間に割り込んできた。

「雄先輩は、どうですか」

そして、雄先輩の手を取った。

「ああ、そうだね。あかねさん。れいちゃんもお腹すいたよね」

「！」

急に雄先輩が私の名前をいうから、ドキッとしちゃった。

ふっと、横を見ると、あかねがほおを膨らませていた。

(なんで私をあだ名で呼んでくれないの！ あんなにブスな子に、あだ名なんてつけなくてもいいじゃな

い！ 美しい私でしょ！ ふつう、あだ名をつけるのは！) って、顔をあかねがしている。

「は？」

私は、ふいにそんな声をあげてしまった。

雄先輩がそれに気づいて、私に向いている方に向くと、あかねの顔が真っ赤になった。

「はっ、あつ、で、では、行きましょうか……」

あかねは嫉妬の気持ちをごまかし、そんなことを言った。

あ、あかねもそんなこと言うのね……。

これであかねの本性を気づいてもらえたら、どんなにいいだろう。

私たちは緑山レストランに向かって、歩きだした。

「雄先輩の趣味はなんですか？」

つい、雄先輩にきいてみる。

「そうだなあ〜。絵を描くことかなあ〜」

へえ。意外。雄先輩はそんな趣味なんだ。私も絵を描くのは大好きなの。

「へえ、私も絵を描くことが大好きなの！ 今度、私と一緒に絵を描いてくださらない？」

あかねがにやりと笑った。

うそだ！ あかねは絵を描くことは好きじゃないって！

だって、このあいだ私に、

「あらあ、まだそんな絵を描いてるの？ お子ちゃまあ〜。私はそんなタラなことほしくないわよ。それより、

なんなの？ この絵！ 笑っちゃうんだけど？ 私は絵を描くことは苦手なのよ！」
って。なんなのよ？ 嫌いとか好きとか。

雄先輩に近づいたために、そんなこと、言わないでくれる？

「はあ〜」

やだ。おもわず、ため息が出ちゃったじゃない！

「ねえ。この間、私に……。うぐっ！ むむむ」

私は、あかねに口を塞がれた。

「あら、なんのことかしら〜」

雄先輩がキョトンとしている。

「こっちからも、質問したいんだけど、れいちゃんとあかねさんは、どこで、知り合ったの？」
雄先輩が気をとりなおして聞いてくる。

「う〜ん。小学校から一緒でした」

「そうね。しかも、ずっと同じクラスなんですよ！」

あかねが笑った。

「もうそろそろで、車が来るので」

あかねが自分の腕時計をみた。

「あっ、その腕時計かわいい」

私はあかねの腕時計をみて言った。

「ありがとう。れいかは持っていないの？」

「うん」

頷く私。

「女子力低いわね」

あかねが私の耳元で言った。

ムカツ！ なんて、あかねに言われなきゃいけないのよ？

みためは可愛いけど、中身はブサイクね。あかねは。

「あっ、きた。雄先輩とれいか。乗りましょう」

そう言って、あかねは私のことを助手席に押し込むと、バタッとドアを閉めて、雄先輩と隣で、私の後ろの席に座った。

「え？」

普通は、逆じゃない？

あかねは助手席で、私と雄先輩が後ろじゃない？

なんか、あかねは雄先輩に近づいたために、積極的すぎない？ って、いうか、押しが強すぎ！

はあ。でも、雄先輩は私より、あかねと隣の方がいいよね。美人だし。

なんか胸が痛いなあ。

「れいちゃん。起きて！」

雄先輩が私の肩を揺さぶる。

「はっ！」

私、寝てた？

私は自分が寝ていたことに気づいた。

「あれ？ あかねは？」

確かに、見渡してもあかねがいない。

どこに行ったのかなあ？

「先に行っちゃったよ。『ゆっくり、寝かしておきましょう』って。でも、れいちゃんが困ると思ったから、僕はれいちゃんが起きるのを待っていたんだ」

私の顔が真っ赤になった。

「あ、あの。迷惑になりましたね、私」

「そんなことないよ。行こう。緑山レストランへ」

「はいっ！」

私は車の外にでた。

「わく。こんなところ、初めてきました。雄先輩はここへきたことがあるのですか？」

私は聞いてみた。

「うん。ないかな。でも、ここに似たような場所にはきたことはあるよ」

私たちは駐車場から、レストランの中に入った。

「あの。あかねはどここの席にいるのですか？」

「あそこ」

雄先輩が一人の女の子に手でさした。

「ほんとだ！」

私と雄先輩が小走り、あかねの所へ近づいた。

「こんなところにいた！ 探したんですよ」

私たちはテーブルについた。

「で、何を頼みますか？」

あかねが、雄先輩にメニュー表を渡した。

「ええと、私、カルボナーラで」

私はカルボナーラを食べることにした。

「じゃあ、僕はステーキで」

雄先輩はステーキにしたそうだ。

「雄先輩、ステーキがお好きなんですね」

あかねが可愛く言った。

「そうなんだ。うちのじいちゃんが作ってくれた時から好きになったんだ」

雄先輩が笑った。

しばらくすると、テーブルのうえに、色とりどりの料理が並んだ。

「お、美味しそう！」

よだれがでてきてしまいそうだ。

「いただきます！」

私が頼んだカルボナーラをスパッととって、一口食べた。

「お、お、お、美味しい！」

ほっぺが、落ちてきそう。

「雄先輩のステーキも美味しそうですね」

「うん。とつても、美味しいんだ」

「そうなんですネ」

と、その時！

黒ずくめの男、二人が店内に入ってきた。

え！

心臓が止まりそう。

黒ずくめの男の一人がバッグから、ナイフを取り出して、一人の店員を人質にした。

「おいっ！ てめえくら！ 金をだせ！」

きゆうに、そんなことを言うから店内の人もびっくりしてる。もちろん私も。

「きゃあ〜！」

黒ずくめの男が、一人の女性を人質にしている。

「こいつがどうなってもいいのか！」

黒ずくめの男が叫んだ。

「や、やめてください〜」

人質にとられた女性が叫ぶ。

「おまえはだまれ！」

「は〜」

女性は言われるままだ。

女の人は涙目になった。

だだだだ、大丈夫なの？ この状況。

私はつばを飲む。

もう一人の黒ずくめの男がバッグを渡す。

「この中にパンパンに金を入れろ」

黒ずくめの男がニヤリと笑った。

「ゆ、雄先輩。ど、どうしましょう」

私は小声で雄先輩に言った。

「け、警察に……」

雄先輩の声が震えてる。

「いやあ〜！ 私、こわ〜い！」

あかねが言って、雄先輩の肩に倒れこむ。

「大丈夫だよ。きつと。あかねさん、警察に電話して」
雄先輩が小声で言った。

「おい！ 店内にいるやつ！ カーテン、窓、全部閉めろ！ あと、おまえら全員のスマホを集めろ！」
バッグを出した方の男が言った。

うろう。こわっ。私、殺されちゃうの？

店員が袋にスマホを入れていく。

びっくりすぎて、あかねがスマホをおとしてしまった。

ガチャン！

スマホを落とした音になる。

「スマホをください」

あかねの番がきて、あかねがスマホを仕方なく渡した。

もう、私の番がきてしまった。

私は、店員にスマホを渡した。

雄先輩も、あかねも、その袋にスマホを入れていく。

「おい！ おまえたち！ しゃべるなよ！」

黒づくめの男に脅される。

「全部のお金を詰めました」

「おお。おまえたち！ このことは誰にも言うなよ。言ったら殺すからな」

そう言い残して、黒づくめの男が出ていこうとした。

「ちよつと、待ってください」

雄先輩が叫んだ。

「なんでそんなことをするのですか？ 理由を知りたいです」

雄先輩の顔に汗が流れた。

「おまえらになんにも、話すことはないんだよ！」

黒づくめの男、二人が雄先輩に襲いかかってきた。

「れいちゃんたちは逃げて！」

雄先輩が私たちに指示した。

「はい」

私たちはこのテーブルから離れた。

やばっ！ 雄先輩、そんなこと言って、大丈夫なの？ え、え？

雄先輩の方が逃げてようろう！

「うぐっ！」

雄先輩は襲いかかってきた男にお腹を殴られた。

「雄先輩！」

私は思いのあまりに叫んだ。

ゴンツ！

雄先輩が頭を打ちつけた。

血が流れだす。

「雄先輩！」

もう、黙ってはいられない！

ついに、雄先輩がナイフで複数回刺された。

ゆゆゆゆ、雄先輩！ このままでは、雄先輩が……。私、雄先輩を守りたい。だから、神様！ 力を貸してください！ 雄先輩、いま私、雄先輩を助けたいです！

私は思い切って、雄先輩の前に立った。

「人に乱暴をしてはいけません。私が雄先輩と同じ目にあわせてあげましょうか」

私は深呼吸をして、力を入れると、ナイフを持った男の方を、バシツつと、蹴った。

回し蹴り！

すると、その男のナイフが飛んでいった。

じ、自分でもびつくり！ 自分にこんな力があるんだ！ それとも、黒ずくめの男が弱いただけなの？ よし、これなら……。し、これなら……。

「おりゃー！」

私はその男の腹を蹴ったり殴ったりした。

「うぐっ！」

その男が唸った。

やだ。もしかして肋骨、折れちゃった？

「何してる！」

もう一人の男が私を殴ろうとしてきた。

私は、黒ずくめの男の攻撃をよけると、バシツ！ 私は襲いかかってきた男の腕を掴むと、ぶんまわして、投げつけた。

名付けて、ぶん回しショット！ なんちゃって。

バンツ！ 投げた男が壁に当たった。

男の頭から血が流れる。

い、いたそう。

でも、雄先輩の方がいたそう。

壁に穴が開く。

うう、自分の力。こわっ。恐怖。

今、初めて自分の力を知った。

「みんな！」

「うん。」

グイッ！ その投げた方の男の周りに人が集まって、動けなくした。

「テープを！」

男の人に言われたから、一人の女性がテープを持ってきて渡して、男の手足をぐるぐるまきにした。さて、もう一人の男の方は、私が踏みつけている。

「こっちにも、テープが欲しいわ。持ってきてくれますか？」

私はあかねに頼んだ。

「了解！」

あかねが走ってテープを持ってきてくれた。

「ありがとう」

私は優しく言って、そのあとは乱暴に男の手足にぐるぐるまきにテープをまきつけた。

「あの！ 警察に電話してください！」

私は店員に言う。

「はい！」

店員は、警察を呼びだした。

「店員さん！ あとは、スマホを返してくれませんか？」

あかねが叫んだ。

「わかりました」

店員がスマホを並べていく。

そういうところだけは、ちゃっかりしてるんだから。

つい笑っちゃう。

ハッ！ 雄先輩は？

やだ、私。一番大切な人を忘れていた。

「雄先輩！」

雄先輩は、血だらけになって、イスに座っていた。

「雄先輩！ 大丈夫ですか！」

私は雄先輩に駆け寄る。

「れいちゃん。すごいね」

雄先輩が笑顔で私のことを褒めてくれる。

でも今はその笑顔がづらいな。

「わ、私、実は空手を今まで習っていて……」

言いながら、恥ずかしくなる。

しかも、空手道場では、一番強いと言われていたのを思い出す。

「そ、そんなことより、きゅ、救急車を！」

そうだ。そんな話をしている暇はない。

「私、呼んできますね！」

私はスマホが並べてある場所へ行った。

「ええと、私のスマホは……。あつた」

私のスマホは、ピンクと白と水色のチェック柄のキーホルダーがついた、スマホだ。

「はやく、救急車を呼ばないと」
私はいそいで、電話番号をうつと、すぐに、事情を話した。
3分ほどでつくらしい。
私は雄先輩のところへ駆けつけた。
「雄先輩。あと、3分ほどでつくらしいです」
「そう」

④ 雄先輩との別れ

雄先輩はそう言つて、私の手を取つた。
ドキッ！ 胸が高鳴る。
「僕は、もうここで、お別れかもしれないんだ」
え……。うそ……。でしょ……。
「ごめんね……」
雄先輩が私をぎゅっと、抱きしめた。
「僕は、ずっと、れいちゃんが……」
雄先輩の胸の中は暖かい。
私は雄先輩への気持ちを今、言うことにした。
「好き」 「好き」
私たちの声があつた。
「今まで、ありがとうございました」
私のほおに涙が流れる。
「本当に、今までありがとう。僕が死んでも、忘れないでね。ずっと、見守るから……」
雄先輩はそう言い残して、動かなくなった。
「雄先輩！ 雄先輩！」

私は雄先輩を揺さぶる。

そこにあかねがやってきた。

「え……。どうなっているの……。うそ……」

あかねの手のうえに大粒の涙が落ちてきた。

「そんな、そんな……」

あかねが立ち尽くす。

「雄先輩……。雄先輩……」

私も悲しいよ。

でも、雄先輩は見守ってくれと、言ってくれた。

だから、ずっと一緒。ひとりぼっちじゃ、ないんだ。

「雄先輩！ 今までありがとうございました！」

私はそう言って、立ち尽くした。

外からは、ピーポーピーポーと、パトロールカーと救急車のサイレンがなっている。

これからは、私と雄先輩は一つなんだ。ずっと一緒なんだ。寂しくないんだ。

本当に今までありがとうございました！

今では桜の花びらが宙に浮いていた。

さようなら！ 雄先輩！

さようなら

令和5年10月12日

著 者 KANNA
発 行 者 鈴木 征浩
編 集 谷口 里穂
発 行 opsol book
opsol 株式会社 opsol book 事業本部
〒 519-0503
三重県伊勢市小俣町元町 623 番 1
TEL 0596-28-3906
FAX 0596-28-7766
MAIL info@opsolbook.com
WEB <https://opsolbook.com/>

本書の内容の一部、または全てを無断転載・複写・デジタル化・
アップロード行為は著作権法上の例外を除き禁止されています。